

三本木原開拓史要 (二)

新渡戸 憲 之

三、三本木原と伝翁

三本木原と新渡戸伝翁とは切つても切り離す事の出来ない深い絆に依つて結ばれているが、伝翁が広漠たる土地に鉄を入れるまでになうして三本木原と結ばれたかその経緯を明かにしたい。

もと／＼新渡戸家は遠く人皇ヲ五十代桓武天皇のヲ五皇子葛原親王を祖とし、平を姓とし後に千葉姓新渡戸姓と改め、伝翁はその四十一代となつてゐるが、寛政五年（一七九三）十一月七日花巻城に生れ幼名を縫太、後に次郎八、伝と改め、太素と号し字を浣卿、後に常邊と改めた。父は伝藏、維民といふ字口章卿、後に痴翁と号し、維民の七代前の新渡戸内膳平春治より慶長三年以来南部藩に仕え、代々和賀郡高松村を知行し、花巻の城主であつた。又父維

民は上杉流に謙信流ともいう。兵学師範免許文十四世で軍号を権征軍師湛泉剛弼といひ、兵法家として名が高かつた。

花巻城は古くから仙台藩に対する押への城として久しく城代を置いて附近八幡の代官を統率したが、南部世六世利敬公の文化二年（一八〇五）藩政の大改革があり、花巻城代の権限を著しく削ぎその上、城郭の一部を取こわそうという事であつた。この為花巻の城主は太いに憂慮した。文政三年（一八二〇）藩主利敬公薨じ、利用公嗣ぎ、御代替と称合に権限復活を策謀し、事態は不穩の形勢であつた。維民は若い城主に兵法を教えて居り、兵法上から南部藩にとって花巻城の重要性を説いて来てゐる關係上この策謀に対しては苦しい立場に置かれていた。こ

の頃新渡戸の本家である新渡戸丹波口盛岡藩家老職にあり、種々強硬な運動に対して口不刊である事を注意していたが、父維民他二名は種々な誤解も手伝って遂に首謀者と見られ、同年十二月十五日「半地御取上田名部御給人被仰付し」と申渡され、一家は直ちに花巻を去り、下北田名部の知行地川内へ移らねばならなかった。同日、八十余文の祖田口里方太田家へ預け、家財をまとめて花巻を出発したが、父維民五十一文、伝時に二十八文、田と専と長女恵美（六文）とその年六月十一日に生れたばかりの長男十次郎（当時幼名は民彌、新渡戸稻造博士の父）を連れ、六人の供をつれ大雪の中を一家苦難の旅立ちをした。

花巻―盛岡―沼宮内―戸―三戸―三本木―七戸―野辺地―横浜―田名部―川内

と十日かゝつて翌文政四年正月三日川内村に着いた。取敢えず上町山崎屋彌三治宅に落着いた。こうして豊風と吹雪に明け暮れる奥南の細道を辿りつゝ、青年伝口幾多の飢餓を胸に秘めつゝ、広漠たる三本木原をよぎり、印象的な一歩／＼を残して行つた。

父維民は軍学者として其の証蹟に没頭し、家政を

深く省みひかつた關係上伝口部屋住の身の二十文頃から既に家政を見て居た。又半地取上により年僅か五兩だけの御手当しかなく、花巻出発については実に悲壮な決心で出立した事は勿論であるが、本家の新渡戸丹波の「一ヶ庄五兩で口中行届申敷年々三人扶持助力可申」との申出をも「難有思召に御空候先づ彼地に罷越相働き何か両親の介抱の手段も可有之何れ彼地に住居進退の極る迄は御預り置被下度及はざる時に頂戴も可仕と辞退す」と『一生記』に記入してあるが、この覚悟は実に善く、田名部川内住居中の断乎たる活動は勿論十和田山抜出しの縦横の活躍又後年三本木原開拓の鉄の意志と強固にして雄大な計画とその実行力は若年二十八文の一家悲慘のどん底から湧然と盛り上り且つ鍛え上げられた不屈の魂として実現された凜と考えらるる。

川内村住居に就いては兼ねて憩意の藤田三左エ門の厚意盡力に依る所実に大である。

こうして文政四年（一八一七）伝二十九文より文政九年（一八一六）三十四文に至る六年間の辛苦の生活はたゞ両親に精神的な激励慰安と経済的不自由をかけまいとする孝道の二字の実践者伝として生き

ぬき、士分から商人となり、敢然として小商物のあきないをし、店を開き、元の知行地高松村安野に因んで安野屋素六と名乗り、羽印の屋号を用いた、一筋に商賣に精進した。

この活動振りを見た父維民の心中は如何ばかりであつたろう。新しく発見された資料の中に維民の苦衷を披瀝した二文があるので御紹介したい。

維文政五年壬午春正月日於

天照大神天滿大自在天神龜邊稻荷大明神此爰ハ囁
大神熊野山大神權現白山大神權現之神前新渡戸平六平
維民拜哭曰嗚呼臣不幸而庚辰冬離於累世之榮地棄
宗廟散財器而得於罪比藩之川内矣暫殘捨在母情功
憂傷萬結故鄉為之斷腸矣昊天不憐乎不圖護免以我
為華牧許訟之黨哉信所不然也此天明察覽之若天之
恩澤如移干明鏡則不及論於敢忠不忠之徒而自蒙天
誅乎可歎生而不得為國士之臣又不得為我家之老不
如何如何如主何嗚呼蒼天亡我乎不然者諸仙神如有
神靈者以照鑒於維民之心伏尚祈歸於還鄉榮邑離
別之憂而垂鑒旨在母親為祭祀宗廟平維民頓首敬白

とあり、又

祭宗廟文

維文政七年甲申年夏五月 日我 先祖代々及聖翁
勇賢居士俊賢常賢居士ノ御靈前ニ罪人平六維民拜
哭頓首シテ奉申仰此許流罪ノ恨元ハ花牧ノ古政ヲ
替易シテ新ニ作奉ント欲セラル於此諸士心ヲ一致
シテ民百姓ノ困窮ヲ見ルニ難忍強許ヲ上奉ルハ全
ク我々父子ノ策ル所ニ非ス是固ク諸々ノ神佛ノ御
照覽スル所也凡ソ上ヲ不忌懼御政直ヲ誹謗スルニ
非ス嘗々萬民ノ煩惱不為様ニト可致ハ臣ノ臣タル
道ニシテ世ヲ救キ悲ハ是又世祿ノ臣ノ高恩ヲ謝ス
ルニ似タリ豈國ノ殘廢ヲ不救者ハ所謂臣ノ臣タル
道ヲ不知者ナレハ也生憎ヤ不圖護人ノ為ニ我々三
人配流セラル小且テ比濱ノ藩ニ流罪セラル於是
宗廟及老母ヲ棄捨シテ家内悉ク離散セリ是天災ニ
非ズ小エカ不徳ノ至大ナレハ也然ハ其罪ノ高キ
如須彌山其深キト如大海死シテ 先君ニ拜謁ノ
地ナク泣涕シテ一瞬モ愁ヲ解クコトナシ飲食其味ヲ
忘レテ歷年凡五年矣今考ルニ凡世ノ盛衰轉変ハ古
今相同シテ盛ル者ハ衰ヘ衰ル者ハ盛ニナル者是皆
天道ノ然ラシムル所也然ラハ我々父子雖得上之
質天道未タ棄王ハス於此我身ヲ粉骨細碎シテ忍恥
雖得譏取テ是ニ當セスシテ別ニ大業ヲ創シテ

先君嚴父ノ御讀ヲ沈靜シ奉リ且ハ老母ヲ恤テ歎爲
養育ル丁造次轉沛不安心此ニ有年矣然ラハ

先君及嚴父若シ 神靈アラハ隣ヲダレ影向ナツテ
中太素カ志願ヲ遂サセ玉フヘシ然ハ我胸中ノ怨恨
ヲ解キ仰テ 先君ノ宗廟ヲ安置奉ンテヲ極ニ稀
フ己敬白

とあり、言々盡君至誠を吐露し策謀が自分からの
ものでない事を証し諍ぜられた苦しみが勿論、別に太
素を草創せよとまで云い、憂患伝の志願を遂げさせ
給えと実に肺腑を抉り肺腑をしぼつての熱筆に口そ
の至誠真心たる感涙を催すものがある。

この父の誠心を良く知る伝は又草木の商売にまで
手をのびし、江戸へ登り兩三年にして商略家たるこ
とを認められ順調な発展をしていった。三十二次に
なる文政七年二月には又江戸へ太田村を送り利益を
得たので五戸通興瀬（現在の十和田町）の内十和田
山より楓、桂の伐出しを目くろんだ。即ち「一生記
」に

「九月下リ此頃田名部村木下落にて是西に付
五寸角五十五本程の事にて十石目代五拾兩程な
り（中略）此節の下落にては難凌今更商筋見替も

土東向敷五戸通興瀬の内十和田山より楓、桂
を伐出し商賣申度事といふ、何れも同意して四人
仲間早々手配に及び十二月太素藤田の仙子田ノ沢
ノ三四郎能登屋仙子銀杏木の喜太郎召連れ内見と
して興瀬村に行き興瀬内蔵家来小笠原喜右エ門を
宿とし内蔵の役人小笠原忠左エ門小笠原重藏小笠
原佐左エ門小笠原和知助四人に引合談判いたし同
所より山左忠人相加り我等四人にて山中に入り三
日程見分願立の事共役人中に不談罷歸るし
とあり愈々本格的な草木商となるが勿論、三本木原
南拓の一端として十和田湖南端への一步を踏み出し
た。

しかし文政八年正月には長女惠美疤痕にかゝり病
むこと十二日にして二十日僅か十一文の可憂の盛リ
で病死し、川内泉龍寺に火葬して埋葬した。異郷と
も云うべき配流川内でのこの不幸は父母を始め伝の
悲歎の上はく落膽のさきは他人の涙をさそつた。

又川内での苦難以来新度戸家に於ては難諦りせず
、端干の職も立てず、三味線の音も禁じ、ひたすら
質素にと家憲として今日に至っている。

次いで文政八年九月より興瀬へ行き

「夫々手配致し山禮金は一ヶ年五拾兩にて奥瀬内蔵殿へ相納申候し」

とあり、愈々手筈も整ひ仙百人本境二十人を集め、手代定八を伴つて十和田山に入つた。

十和田山に入つて手入した者は伝の以前に天明年中には江戸栖原屋武共衛あり、寛政年中には田名部の熊谷又共衛、文化初年には飛弾の大野屋茂八、文化中頃には伊勢白子、田村屋長右エ門、文化末年に口尾州名古屋の村瀬陸空があり、文政初めに羽州大館の金成寅之助らが山へ入りし、何れも二三千両の損をして引揚けていたのである。

又當時は、十和田湖に口青龍大権現の居所といふ、土、出家、修験女の参詣を禁じ、里人は赤、ハ、舟、蛇等の言葉と忌み、奥瀬は禁制として居り、千古のまゝの神秘な聖地としていた。併しこれでは舟がなけり湖を渡ることも出来ないので、伝は先ず祭文を以て神に祈り、新に船を造り、米味噌と鹽蝦し、忌言葉も云わせ、奥瀬も充分用いて労働に不安をなくし伐出しを行つた。

「夫より奥瀬に諸用を説じ澤田村は酒屋左共衛、田村は畠田左衛記、蔵島村は肝入彌共衛、白石

村は伝之丞、市川村は源右エ門、右の通り宿と定む、八戸城下へ行き同家新渡戸頼右エ門へ止宿す、此節十和田山伐出しの材木川下市川より小廻しにいたし御当地較浦に棚立置き船配又や薩入登登は申度候し」

とある。次いで文政九年五月漸く待ちに待つた遷生御沙汰相蒙り、長年の誤解もとけ、御赦免の吉報があり、一同雄躍歡喜して花巻へ退去したが、伝の長男十次郎は一入で川内へ来、七入となり去つたが後年父の良き協力者となり三本木京南柘に心血を注ぐ一つの絆となつた事は誠に奇しき因縁といわねばならない。日度葬じていた祖母も杜健で一同大喜びした。そして僅かに二十五石となる。併し伝には十和田山の材木仕事が残つてゐる。たゞ花巻の新居で安閑としてはゐられない。再び十和田山に入り

「夫より灰手瀬切本申取の三法を仙讀共に伝授し、山麓大尊萬能鉄の用意を致させ、川筋甚難葎ゆへ水増の外なしと落口瀧の上方三十六間の所へ三ヶ所石倉を取立棚立結び笹葉を以て水を囲ふ、翌春匠に水増事高さ三尺五寸、湖水は東西四里余南北四里、其外に入江十ヶ所あり、此の政に十輪田

とふ、尤手配荒増に取計ひ川内に帰リ、六ヶ年の住宅を取仕舞ひ花巻へ引越の用意をなすし

そして九月には、川内に居り六ヶ年住居し緊留した店をしまひ、七日間に亘り謝礼の当酒宴を兩き、十日家族を纏めて花巻に遷住し、坂下へ住居し新に儉約の法を立てた。

「十月下旬十和田山に入る、湖水充滿して川下湯水し相坂の渡船場船往來妨り難く川下の人、春の洪水を恐る、豊稔役人等之を談ず、更に心配無之事三尺の水増のみなり、土地を崩し人家を流す事決して無之と挨拶し其儘に差置候事し」

とある。又文政十年には江戸へ登る途中、日光山に登り参詣の後、宇都宮より奥宿に廻り、利根川よりの分流として名高い江戸川（人エ川）を舟で下り江戸着、その後三月には直ちに十和田山に入り、扶木流しの新しい方法を仙子に教えた。この位の石数を伐採したか口次の記録で良く解る。 今年八月

「棚挂角尺詰メ四千五百本石目六千五百石目石の内大は長四箇巾三尺角二尺五寸以下小は一向の尺角なり、下摺の小枝無之船積六ヶ敷澤田村左内より桂板子尺五寸一向厚六寸二百挺買入、積入

手配の事し

これをもつてしても如何に十和田山には巨木が主い繁つていたかよく解る。

又川内で千石船を新造し「永宝丸」及び「運光丸」と命名し盛んに木枝の運搬をした。

文政十一年には江戸に大火があり、材木を送り大利を得た。

こうして伝は度々十和田山と八戸、川内並びに各地を自ら跋涉し往來したが、この頃から不毛の地三本木平、月が出、月が入る広いく三本木原の兩拓を計画し、將來の夢として次々に胸中深く去来する様になつたものゝうである。又江戸の往復の途中には必ず遠隔の地まで歩を運び、仙台石の巻より江戸へ登り、下總、水戸、常陸、下野地方を廻り、或は羽州新庄より会津へ出て日光山、時に宇都宮地方の新田開発に口深い関心を拂うなど、名所旧跡を探る面にも閑型事業の實際家について、實際の方法、計画などを仔細に調査して歩いた。後年の一生をかけた大事業もこうして少しづつ夢に輪をかけ、頭に画かれつゝ、も夢が段々と大きくなつた事を思へば三本木原の夜明けは一朝にして成つた事ではない。人

向として苦しみ、幾多の艱難辛苦の等しい人生修業の
賜が已れを超越し利害を克服して初めてもたらした

真の夜明けである。

(三三・一・一九)